

学 位 論 文 要 旨

氏 名 川上 永子

題 目 OSCEの授業改善のための学生発話に含まれる特徴的な単語と表現の
分析に関する研究

学位論文要旨（和文2,000字又は英文1,000語程度）

本研究は作業療法士が行う技術教育に必要とされる、患者に安心感を与え正しい検査から
妥当な結果を得る説明能力を評価するObjective Structured Clinical Examination（客観的
臨床能力試験と訳される：以下、OSCE）を対象とする。OSCEは医学界で臨床技能を客観的
に評価するために開発された試験であり、「態度」と「技能」で評価される。「態度」は状
況に応じた言動（声かけ・触れ方・動かし方）により採点され、「技能」は手順に沿ってそ
の検査が行えるかが採点される。療法士養成校A大学においては2013年度よりOSCEを導入し
ているが、その導入方法は臨床技能を客観的に評価するための試験のみを行うのではなく、
試験として扱う検査技術がより質の高い臨床技能として習得できるようOSCEに対応した授
業（以下、OSCEの授業）を行ったうえで最終的に試験を実施している。OSCEは評価基準の
不統一など実施上の問題点も指摘されている。ただし、山路らは評価者の採点結果の一致率
について、評価者である教員の判定における一致率はおおむね70%であり、どの技術に対す
る試験においても一致率に差を認めなかったと報告している。つまり、OSCEの「態度」に関
わる状況に応じた声かけには、具体的な指導方法や採点基準がないなかでも、有資格者であ
る教員間ではほぼ一致するといえるが、そのプロセスは暗黙的といえる。暗黙的であるが故
に、声かけの適切さの指導において何がどのように不適切かを具体的に指導できていない可
能性があり、教員間でも何をどの程度どのように修正すべきかの認識に差分が生じている可
能性が考えられる。2018年に従来のOSCEの授業を受けた学生の発話にみられる単語や表現
をテキストマイニングの手法を用いて抽出し、特徴単語と特徴表現の具体例を提示すること
で、指導の具体化や教員間の共通の認識をもつための支援になり得ると考えた。支援の検討
に先立ち、教員が感じている学生の声かけの適否、つまり単語の使い方や表現の違いが成績
に影響を及ぼしているのか、及ぼすとしたら具体的な単語や表現が存在するのかを検討した。
その結果、成績の下位群には①不安感に影響すると思われる特徴的な単語や表現、②正確な
検査実施に影響すると思われる特徴的な単語や表現が存在した。

次に、これら具体的な事例にみられる特徴単語と特徴表現が、それぞれ成績の上位群と下位群の特徴と捉えるか否かをOSCEの授業を担当する教員に聞き取り調査を行った。その結果、上位群の特徴的な単語と表現に対して大きな違いはないが、下位群の特徴的な単語と表現に対する捉え方には違いが認められた。つまり、技術教育において教員間で共通の認識をもつ必要性が示された。そこで、不適切な声かけの減少に繋がる新たなOSCEの授業を検討し、2020年のOSCEの授業を受ける学生を対象に実践した。具体的には教員間の共通の認識をもつための新たな教員用指導マニュアルを作成し、新たなOSCEの授業開始時の学生自身の状況を確認するため、学生による自己の振り返りが行えるようOSCE声かけチェックリストを作成した。その後、OSCEの授業時には教員用指導マニュアルと学生のOSCE声かけチェックリストを活用した新たなOSCEの授業を実施した。2020年も2018年と同様にOSCEの授業終了時に行う試験時の発話を収集し、テキストマイニングの手法にて分析し、成績の上位群と下位群の特徴単語と特徴表現を抽出した。また、従来のOSCEの授業と新たなOSCEの授業を受けた学生の発話にみられる特徴的な単語についての比較検討を行った。その結果、新たなOSCEの授業を受けた学生は成績の上位群・下位群共に従来のOSCEの授業を受けた学生の下位群に見られていた①不安感に影響すると思われる特徴的な単語、②正確な検査実施に影響すると思われる特徴的な単語は出現しておらず、上位群・下位群共に多くの具体的な内容語を用いて説明している。しかし、2020年の新たなOSCEの授業を受けた学生の下位群の特徴単語は不適切とは言えないまでも改善の余地は残る。また、教員用指導マニュアルやOSCE声かけチェックリストを用い、適切な声かけの具体例を基に授業を行ったことは、教員間のみならず学生とも共通の認識をもつための支援に繋がり、新たなOSCEの授業は学生の技術習得における教育の質の向上になり得ることが示唆された。